

『開経偈』↓『四弘誓願文』↓『修証義』↓『普回向』または『回向文』または『在家略回向』↓『普回向』の順で読誦する。
お盆の時や、仏壇の前で読むときは、『回向文』の代わりに『在家略回向』を読誦し〇〇のところに来
修証義を諷誦すと読誦する。『普勸座禅儀』を読誦するのも良い。

開経偈

無上甚深微妙法
百千万劫難遭遇
我今見聞徳受持
願解如来真實義

四弘誓願文

衆生無辺誓願度
煩惱無尽誓願斷
法門無量誓願學
仏道無上誓願成

修証義

第一章 総序

生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり、生死の中に仏あれば生死なし、但生死即ち涅槃と心得て、生死として厭うべきもなく、涅槃として欣うべきもなし、是時初めて生死を離るる分あり、唯一大事因縁と究尽すべし。

人身得ること難し、仏法値うこと希なり、今我等宿善の助くるに依りて、已に受け難き人身を受けたるのみに非ず、遇い難き仏法に値い奉り、生死の中の善生、最勝の生なるべし、最勝の善身を徒にして露命を無常の風に任すること勿れ。

無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草に落ちん、身已に私に非ず、命は光陰に移されて暫くも停め難し、紅顔いづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし、熟観する所に往事の再び逢うべからざる多し、無常忽ちに到るときは国王大臣親暱従僕妻子珍宝たすくる無し、唯独り黄泉に趣くのみなり、

己に随い行くは只是れ善悪業等のみなり。

今の世に因果を知らず業報を明らめず、三世を知らず、善悪を弁まざる邪見の党侶には群すべからず、大凡因果の道理歴然として私なし、造悪の者は墮ち修善の者は陞る、毫釐も忒わざるなり、若し因果亡じて虚しからんが如きは、諸仏の出世あるべからず、祖師の西来あるべからず。

善悪の報に三時あり、一者順現報受、二者順次生受、三者順後次受、これを三時という、仏祖の道を修習するには、其最初より斯三時の業報の理を効い驗らむるなり、爾あらざれば多く錯りて邪見に墮つるなり、但邪見に墮つるのみに非ず、悪道に墮ちて長時の苦を受く。

まに知るべし今生の我身二つ無し、三つ無し、徒に邪見に堕ちて虚く悪業を得得せん、惜からざらめや、
悪を造りながら、悪に非ずと思ひ、悪の報あるべからずと邪思惟するに依りて悪の報を得得せざるには非
ず。

第二章 懺悔滅罪

仏祖憐みの余り広大の慈門を開き置けり、是れ一切衆生を証入せしめんが為なり、人天誰か入らざらん、
彼の三時の悪業報必ず感ずべしと雖も、懺悔するが如きは重きを転じて軽受せしむ、又滅罪清浄なら
しむるなり。

然あれは誠心を専らにして前仏に懺悔すべし、恚麼するとき前仏懺悔の功德力を我を拯いて清浄ならしむ、
此功德能く無礙の淨信を生長せしむるなり、淨信一現するとき、自佗同じく転ぜらるるなり、其利益普
く情非情に蒙ぶらしむ。

其大旨は、願わくは我れ設い過去の悪業多く重なりて障道の因縁ありとも、仏道に因りて得道せりし諸仏
諸祖我れを愍みて業累を解脱せしめ、学童障り無からしめ、其功德法門普ねく無尽法界に充滿弥綸せら
ん、哀みを我に分布すべし、仏祖の往昔は吾等なり、吾等が当来は仏祖ならん。

我昔所造諸悪業、皆由無始貪瞋痴、従身口意之所生、一切我今皆懺悔、

是の如く懺悔すれば必ず仏祖の冥助あるなり、心念身儀発露白仏すべし、発露の力罪根をして銷殞せ
しむるなり。

第三章 受戒入位

次には深く仏法僧の三宝を敬い奉るべし、生を易え身を易えても願うべし、西天東土仏祖正伝する所
は恭敬仏法僧なり。

若し薄福少徳の衆生は三宝の名字猶お聞き奉らざるなり、何に況んや帰依し奉ることを得んや、徒に
所逼を怖れて山神鬼神等に帰依し、或は外道の制多に帰依すること勿れ、彼は其帰依に因りて衆苦を解脱
すること無し、早く、仏法僧の三宝に帰依し奉りて衆苦を解脱するのみに非ず菩提を成就すべし。

其帰依三宝とは正に淨心を専らにして或は如来現在世にもあれ、或は如来滅後にもあれ、合掌して低頭
して口に唱えて云く、南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧、仏は是れ大師なるが故に帰依す、法は良薬
なるが故に帰依す、僧は勝友なるが故に帰依す、仏弟子となること必ず三帰に依る、何れの戒を受くる
も必ず三帰を受けて其後諸戒を受くるなり、然あれば即ち三帰に依りて得戒あるなり。

此帰依仏法僧の功德、必ず感応道交するとき成就するなり、設い天上人間地獄鬼畜なりと雖も、感応
道交すれば必ず帰依し奉るなり、已に帰依し奉るが如きは生生世世在在處處に増長し、必ず積
功累徳し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり、知るべし三帰の功德其れ最尊最上甚深不可思議なりと
いうこと、世尊已に証明しします、衆生当に信受すべし。

次には応に三聚淨戒を受け奉るべし、第一攝律儀戒、第二攝善法戒、第三攝衆生戒なり、次には
次に十重禁戒を受け奉るべし、第一不殺生戒、第二不偷盜戒、第三不邪淫戒、第四不妄語戒、第五不酤
酒戒、第六不說過戒、第七不自讚毀佗戒、第八不慳法財戒、第九不瞋恚戒、第十不謗三宝戒なり、上来
三帰三聚淨戒、十重禁戒、是れ諸仏の受持したまう所なり。

受戒するが如きは、三世の諸仏の所証なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の仏果を証するなり、誰の智人
か欣求せざらん、世尊明らかに一切衆生の爲に示します、衆生仏戒を受くれば、即ち諸仏の位に
同うし入る、位大覚に同うし已る、真に是れ諸仏の子なりと。

第四章 發願利生

ほつがんにりしよう

菩提心を發すというは、己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり、設い在家にもあれ、設い出家にもあれ、或は天上にもあれ、或いは人間にもあれ、苦にありというとも樂にありというとも、早く自未得度先度佗の心を發すべし。

其形陋しというとも、此心を發せば、已に一切衆生の導師なり、設い七歳の女流なりとも即ち四衆の導師なり、衆生の慈父なり、男女を論ずること勿れ、此れ仏道極妙の法則なり。

若し菩提心を發して後、六趣四生に輪転すと雖も、其輪転の因縁皆菩提の行願となるなり、然あれば従來の光陰は設い空しく過ぐすというとも、今生の未だ過ぎざる際に急ぎて發願すべし。

衆生を利益すというは四枚の般若あり、一者布施、二者愛語、三者利行、四者同事、是れ即ち薩埵の行願なり、其布施というは貪らざるなり、我物に非ざれども布施を障えざる道理あり、其物の輕きを嫌

わず、其功の実なるべきなり、然あれば即ち一句一偈の法をも布施すべし、此生佗生の善種となる、一錢一草の財をも布施すべし、此世佗世の善根を兆す、法も財なるべし、財も法なるべし、但彼が報謝を食

らず、自からが力を領つなり、舟を置き橋を渡すも布施の壇度なり、治生産業固より布施に非ざること無し。

愛語というは、衆生を見るに、先ず慈愛の心を發し、顧愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懐いを貯えて言語するは愛語なり、徳あるは讚むべし、徳なきは憐れむべし、怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり、面いて愛語を聞くは面を喜ばしめ、心を樂しくす、面わずし

て愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘ず、愛語能く廻天の力あることを学すべきなり。

利行というは貴賤の衆生に於きて利益の善巧を廻らすなり、窮龜を見病雀を見しとき、彼が報謝を求めず、唯単えに利行に催おさるるなり、愚人謂わくは利佗を先とせば自からが利省れぬべしと、爾に

は非ざるなり、利行は一法なり、普く自佗を利するなり。同事というは不違なり、自にも不違なり、譬えば人間の如來は人間に同ぜるが如し、佗をして自に同ぜしめて後に自をして佗に同せしむる道理あるべし、自佗は時に隨うて無窮なり、海の水を

辞せざるは同事なり、是故に能く水聚りて海となるなり。大凡菩提心の行願には是の如くの道理靜かに思惟すべし、卒爾にすること勿れ、濟度撰受に一切衆生皆

化を被ぶらん功德を礼拝恭敬すべし。

第五章 行持報恩

ぎようじほうおん

此發菩提心、多くは南閻浮の人身に發心すべきなり、今是の如くの因縁あり、願生此娑婆国土に來り、見釈迦牟尼仏を喜ばざらんや。

靜かに憶うべし、正法世に流布せざらん時は、生命を正法の為に抛捨せんことを願うとも値うべからず、正法に逢う今日の吾等を願うべし、見ずや、仏の言わく、無上菩提を演説する師に値わんには、種姓

を觀ずること莫れ、容顔を見ること莫れ、非を嫌うこと莫れ、行を考うること莫れ、但般若を尊重するが故に、日日三時に礼拝し、恭敬して、更に患惱の心を生ぜしむること莫れと。

今の見仏聞法は仏祖面々の行持より來れる慈恩なり、仏祖若し単伝せずば、奈何にしてか今日に至らん、

いづく おんな ほうしや 一句の恩尚お報謝すべし、一法の恩尚お報謝すべし、況や正法眼蔵無上大法の大恩これを報謝せざらんや、畜類尚お恩を報ず、人類争か恩を知らざらん。

其報謝は余外の法は中るべからず、唯当に日日の行持、其報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は日日の生命を等閑にせず、私に費さざらんと行持するなり。

光陰は矢よりも迅やかなり、生命は露よりも脆し、何れの善巧方便ありてか過ぎにし一日を復び還し得たる、徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり、悲しむべき形骸なり、設い百歳の日月は声色の奴婢と馳走すとも、其中一日の行持を行取せば一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の佗生をも度取すべきなり、此一日の生命は尊ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり、此行持あらん身心自からも愛すべし、自からも敬うべし、我等が行持に依りて諸仏の行持見成し、諸仏の大道通達するなり、然あれば即ち一日の行持是れ諸仏の種子なり、諸仏の行持なり。正に仏恩を報ずるにてあらん。

普勸座禅儀 座禅による静寂は命と心の根源

夫れ参禅は静室宜しく、飲食節あり。所縁を放捨し、万事を休息して、善悪を思わず、是非を管すること莫れ。心意識の運転を停め、念想観の測量を止めて、作仏を図ること莫れ。尋常、或は結跏趺坐、或は半跏趺坐。寛く衣帯を繋けて、斉整ならしむべし。次は右の手を左の足の上に安じ、左の掌を右の掌の上に安じ、両の大拇指、面いて、相拄う。乃ち正身端坐して、左に側ち右に傾き、前に躬り後に仰ぐことを得ざれ。耳と肩と対し、鼻と臍を対しめんことを要す。舌上の腭に掛けて、唇齒相著け、

目は須く常に開くべし。鼻息微かに通じ、身相既に調べて、欠氣一息し、左右揺振して、兀兀として坐定して、箇の不思議底を思量せよ。不思議底如何が思量せん。非思量。此れ乃ち坐禅の要術なり。所謂坐禅は習禅には非ず。唯是れ安樂の法門なり、菩提を究尽するの修証なり。当に知るべし、正法自ら現前し、昏散先ず撲落することを。若し坐より起たば、徐徐として身を動かし、暗詳として起つべし、卒暴なるべからず。嘗て観る、超凡越聖、坐脱立亡も、此の力に一任することを。然れば則ち、上智下愚を論ぜず、利人鈍者を簡ぶこと莫れ。專一に巧夫せば、正に是れ弃道なり。既に人身の機要を得たり、虚く光陰を度ること莫れ。仏道の要機を保任す、誰か浪りに石火を樂しまん。加以、形質は草露の如く、運命は電光に似たり。倏忽として便ち空じ、須臾に即ち失す。直指端的の道に精進し、絶学無為の人を尊貴し、仏仏の菩提に合沓し、祖祖の三昧を嫡嗣せよ。

普回向

願わくは此の功德を以て、普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆共に仏道を成ぜんことを。

在家略回向 亡き人、先祖を供養する言葉

仰ぎ 冀くは三宝、俯して照鑑を垂れたまえ。上来○○経を諷誦す、集むる所の功德は、当家家門先祖代々一切精霊、六親眷属七世の父母、三界の万霊等に回向し、報地を莊嚴せんことを。